

失恋的状况下に於るひとり旅の詩的考察

＜PART I. 岬めぐり＞

6631 古木 登

失恋という言葉で片付けたくないような過去の経験をやたら美化して私はひとり旅に出たのだった。 晩夏。えりも岬。

あなたがいつか	話してくれた
岬を 僕は	たずねてきた
2人で行くと	約束したが
今ではそれも	かなわないこと

彼女とえりも岬に行こうと約束したわけではないが、彼女の思い出を美化するには ちょうどよい場所だと思った。

幸せそうな	人々たちと
岬をまわる	ひとりでぼくは
くだける波の	あのはげしさで
あなたを もっと	愛したかった

くだける波のようなはげしさで彼女を愛していれば、そう、私の愛をはげしく彼女にぶつけていれば、少なくともこんなに後悔することはなかったのかも知れない。

岬めぐりのバスは走る
窓に広がる青い海よ
悲しみ深く胸にしずめたら
この旅終えて 街に帰ろう

えりも岬の霧は、そんな私の感傷をしっかりと包んでくれていた。

<PART II 消灯飛行>

彼女と私の別れは、とても恋人同士の別れと言えるものではなかつた。
互いの意志を尊重しすぎたために却って恋とか愛だとかを表面に出さなかつた。

見知らぬ国のビザを持ち 夜に消えてゆく
見送りはここまでいい 風が強いから
ガラスの向うあの方は くちびる動かさず
パントマイムで 離れてく 人に流されて
忘れえぬこと 忘れるために 努力は いるのね
二度と結ばない糸なう たぐりはしないわ

大人の別れだったのかも知れない。私は幼なさをかくすために、
大人を装っていた。彼女は本当に大人だった。その違いが別れに
結びついたのだろうか。

海岸線をふちどって 都会は かがやく
あの方のせた TAXIは 今どこを走る
もうしばらくは 追いかけて この胸の中に
夜の雲を見降すまで ライトがつくまで
テイルランプをあの方が 星と思うまで

ひとり旅を終えて 街に帰ってきた。思い出の LAUNDRY GATE
にも 山手のドルフィンにも もう彼女はいない。潮風にちぎれて
すぎた湘南海岸に車をとめて、海をみつめている。私の心の
支えは ただ彼女の残していった面影を追うことだけになってし
まったことを考えると 悲しくて仕方がない。 <つづく>